

# 第 3 章

## ゲーツムーツにおける「健康な身体」思想とオリンピックの夢 ——『青少年の体育』の改訂と近代ドイツ体育思想の趨勢——

荒川 敏彦

### 目 次

1. 問題の所在——近代ドイツにおける身体訓練
2. 「軟弱さ」の克服と「健康」な「身体」
3. 『青少年の体育』における古代オリンピック叙述の改訂
  - 3.1 オリンピック競技会への注目
  - 3.2 『青少年の体育』とオリンピックの叙述
    - (1) 〈大群衆〉
    - (2) 〈歓声と興奮〉
    - (3) 〈花冠の名誉〉
    - (4) 〈エケケイリア〉
    - (5) 〈2つの神殿と女性の競技〉
    - (6) 〈祭典の開始〉
    - (7) 〈競技〉
    - (8) 〈宗教性〉
  - 3.3 ヴェルリッツにおける「オリンピックの復活」
  - 3.4 第二版における改訂問題——何が削られ、何が残されたか
4. ギムナスティクとトゥルネン
5. トゥルネンと近代オリンピック

## 1. 問題の所在——近代ドイツにおける身体訓練

古代にせよ近代にせよ、「オリンピック」が体育や体操と深く関わることは明らかである。そこで問題となるのは、体育や体操が前提にしている身体観である。

近代ドイツには、「体育 (Gymnastik)」および「体操 (Turnen)」の実践と概念形成に向けた一大潮流があった。それは単に身体を動かして健康を維持しようといった現代健康文化にとどまらない、身体をめぐる思想的転換であり、したがって18世紀から19世紀のヨーロッパにおいてドイツが置かれた政治的および思想的な状況が深く関連した社会運動であり、政治運動でもあったのである。

19世紀末に隣国フランスのクーベルタン男爵が「近代オリンピック」の理念を掲げ、国際的な祭典としての近代オリンピックを実現させて現在に至る輝かしい流れと、18世紀末以後にドイツで形成され発展した「体育」「体操」の理念と実践とは、いかなる形で交錯していたのか。18世紀末のドイツの体育思想においてすでにオリンピック競技会が視野に収められていたことを踏まえるとき、その萌芽が屈折していった歴史は、近代オリンピックの成立過程の力学を把握するうえで重要な鍵となる。

本稿では、クーベルタンの偉業を讃える言説の後景に退いた、ドイツの「体育」思想の出発点に光を当て、検討していくことにしたい。それは近代オリンピックの成立過程において、「近代ヨーロッパ」が「古代オリンピック」をいかに受容したか、その一面を明らかにすることになろう。考察に当たってはとくに、「近代体育の父」と称されるヨハン・クリストフ・フリードリヒ・グーツムーツ (Johann Christoph Friedrich GutsMuths, 1759-1839) の代表的著作『青少年の体育 (Gymnastik für die Jugend)』の初版 (1793年) における古代オリンピックに関する記述に着目し、さらに初版と改訂第二版 (1804年) との異同にも着目したい。初版で詳述されていた古代オリンピックについての記述は、第二版においてどのように変化したのか／しなかったのか。その痕跡は、ひとりグーツムーツの思想にとどまらず、ドイツの体育・体操が辿った歴史的運命、さらには近代オリンピック競技会の成立と存立について考える際の手がかりとなるだろう。

## 2. 「軟弱さ」の克服と「健康」な「身体」

ジョン・マカルーンは、クーベルタンに先立ってすでに1793年にドイツのグーツムー

ツが『青少年の体育』で古代オリンピックに一定の紙幅を割いたことに言及している<sup>1</sup>。このゲーツムーツの主著は次の一文で書き出されている。

教育の主要目的は、すでに数世紀このかた、強く健康 (gesund) な身体に健全な (gesund) 精神が存する、ということである。<sup>2</sup>

日本でも知られた「健康な身体に健全な精神」である。この引用には、「強く健康な身体」を形成することの重要性を、古典的フレーズに仮託して説得的に提示しようとする意図がうかがえる。本書は、刊行されるとすぐ各国で好評を博し、瞬く間に翻訳紹介されていった。本書が普及する過程で、このフレーズが身体訓練の意義を説いたものとして、そして体育思想の根幹として理解され浸透していったであろうことは想像に難くない。

もちろんこのフレーズを近代で引用した最初がゲーツムーツというわけではない。本書でゲーツムーツはジョン・ロックやジャン・ジャック・ルソーを頻繁に引用するが、ロックは『教育についての若干の考察』の冒頭ですでに、2世紀ローマの詩人ユウェナーリスによる「健全な身体に健全な精神が宿らんことを (人は) 祈るべきである」という願望の表現から一部を切り出して「健康な身体に健全な精神 (A sound mind in a sound body)」と英訳し紹介していたのだった<sup>3</sup>。ゲーツムーツは、ロックが教育論の冒頭で引用したのと同じフレーズを、自著の冒頭にも用いたのである。そうすることで、自らの主張する体

---

1 MacAloon (2008) p.164.

2 GutsMuts (1793) S.XV. (引用文中の下線は引用者による強調。本書に限らず引用に際して訳文は適宜変更している。以下同じ)。1804年の改訂第二版では大きく構成が変更されたが、この句を含む文章は初版の Vorrede における本文から、An die Leser の冒頭に配置替えされている。

3 “A sound mind in a sound body, is a short, but full description of a happy state in this world; he that has these two, has little more to wish for; and he that wants either of them, will be but little the better for any thing else.”, Locke (1824) p.6. もととの出典であるローマの風刺詩人ユウェナーリスの句 (orandum est ut sit mens sana in corpore sano) は、後にジョン・ロックが『教育のための若干の考察』の冒頭に英訳引用してさらに普及し、さらに日本語にも訳されて意味を変容させていった。師尾晶子による第一章での議論、および土岐・井坂 (2002) 163 頁を参照。

ユウェナーリスの原句は「健全なる精神が健全なる身体に宿るようと (人は) 祈るべきである」(土岐・井坂訳) と訳される。つまり、健全な精神が健全な身体に宿っていることが減多にない (現実にはない) ことを前提に、そうであるよう祈るべきだ、というのが原意である。そのことと、通常流布する「健全なる精神は健康な身体に宿る」(だから、健康な身体

育 (Gymnastik) の意義を古代からの伝統のなかに置こうとしたのであろう。そこには、精神が弱々しくなる原因を身体の弱々しさに見出す視点が現れている<sup>4</sup>。それは『青少年の体育』全編にわたって何度も繰り返される基調となっており、この一句に主張が凝縮されていると言える。すなわち、貴族的な生活習慣がもたらす軟弱さ (Weichlichkeit) を排し、健康な (gesund) 身体 (Körper) を養う訓練 (Übung)、とりわけ身体訓練 (Körperübung) によって健全な精神を育成することを目指すのである。グーツムーツは自著の「根本」を次のようにまとめている。

必要に対するぜいたくと同様に、博識 (Gelehrsamkeit) と最高の洗練 (Verfeinerung) というものは、健康 (Gesundheit) と身体の完全性 (Körpervollkommenheit) に対立するものである。したがって、[現在の] われわれの教育がぜいたくのためであり、本当の必要性、重大な必要性を忘れてしまっているとすれば、われわれの教育は誤っているのではないだろうか。——この思想が、私の本の根本をなしている。<sup>5</sup>

このような思想の背景には、啓蒙主義教育思想の影響を受けて 18 世紀に盛んになって

---

を作り上げるべきだ) というフレーズとは、語句が依って立つ意味基盤が正反対であると言える。この点については、北本正章による指摘も参照 (ロック、北本正章訳『子どもの教育』原書房 (2011)、p.298-299)。

ただし、ロックが英訳する際に用いた形容詞は mind についても body についても sound だったが、『青少年の体育』の英訳版では “A sound mind in a strong and healthy body” と訳され、sound だけでなく strong and healthy が用いられている。これはグーツムーツのドイツ語をそのまま訳したためであろうが、グーツムーツがここで必ずしもロックの著作を引用したとまでは言えないことを示してもいるだろう。GutsMuts (1800) p.A4.

またグーツムーツは『青少年の体育』改訂第二版の第 1 章のエピグラフに、メルクリアリスの名を添えて “Gymnastica in corpore sano bonum habitum generare conatur.” を置いている。GutsMuts (1793) S.1. また同じ第 2 版では “mens sana in corpore sano” を本文中で引用している。GutsMuts (1793) S.167. よき性質やよき精神は「健康な身体」にこそあるという身体思想を示す句があちらこちらで引用され、身体訓練の重要性についての自説の説得性を増そうと努めている様子をうかがうことができる。

なお、後にクーベルタンも、オリンピック復興 20 周年の記念メダルにこの言葉がもっともふさわしいと思ったと書き記している。クーベルタン (1962) 113 頁。

4 GutsMuts (1793) S.54. 成田訳 79 頁。

5 GutsMuts (1793) S.XVI. 成田訳 12 頁。

いた市民的な国民教育運動を展開する汎愛派 (Philanthropen)<sup>6</sup> の影響が色濃く見られる。「世界市民 (Weltbürger)」の語の使用にも、その影響を見ることができよう<sup>7</sup>。当時のドイツは、17世紀の三十年戦争の傷跡を引きずりながらも、イギリスやフランスの後を追いつつ、英仏の洗練された「文明 (civilisation)」に対抗する理念としての「文化 (Kultur)」や「教養 (Bildung)」にアイデンティティを求めようとしていた時期であった。またこの時代は、イギリスの産業革命によって資本主義の論理が浸透し始め、農民を含めた労働者が——子どもも含め——重労働の長時間労働を強いられ心身共に歪められていく時代が到来しつつあった時代である<sup>8</sup>。ゲーツムーツが『青少年の体育』のなかで、「洗練」された人間の「軟弱さ」を繰り返し批判し、返す刀で「健康」な身体とそれを養成するための「身体訓練」の意義を説く背後には、イギリスやフランスの「文明」ないし貴族層の「洗練」に対する理念的対抗というにとどまらない、当時のドイツが抱える歴史的・資本主義的な構造的矛盾の克服という大きな課題があったと言える。

当時の社会状況について、ゲーツムーツは階層を超えた目配りをしている。『青少年の体育』では、上中下の3階層に分けて次のように指摘されている。まず「身分の高い人びとは、立ち居ふるまいのエlegantさと健康のことだけしか注意していない」のであって、結局「何もしていない」。つぎに「労働者階級は……教育されていない」。そして「最も貧しい階層は、彼らの子どもをすでに10、12歳で暮らしを立てるために働かせて」おり、精神形成も身体形成も不十分なのに「食べるために学校からもぎとり、奴隷労働に就かせて」、重労働で苦しみ、「多くは成長しないだけでなく、発育不良となり (verwachsen)、身体障害をもつか (Leibeschäden)、あるいはいつも筋肉のすべての弾力性が麻痺して (lähmen)、硬直している (steif werden)」と訴えている<sup>9</sup>。身体訓練の教育という観点からすれば、階層に関わらず、社会全体においてそもそも「身体」が考慮されていないのであって、「体育」の思想と実践は、そうした社会のあり方の根底的転換を目指すものであった。

ゲーツムーツが随所でルソーの『エミール』から直接 (フランス語のまま) 引用していることも、(少なくとも初版における)『青少年の体育』がフランスへの対抗意識というよ

---

6 汎愛派について坂入明は「身分制社会からの人間の解放を願い、民衆にも平等な教育や学習の機会を拡大しようとする多彩な国民教育論の展開運動の一派」とまとめている。坂入明 (1987) 24 頁。

7 GutsMuts (1793) S.54. 成田訳 79 頁。

8 坂入明は、当時のドイツにおけるこの政治経済的背景を指摘している。坂入明 (1987) 26 頁。

9 GutsMuts (1793) S.7-9. 成田訳 28-30 頁。

りは、身分制社会への批判意識や「自然」との関わりを重視する身体育成観を主張していることの現れと見ることができる<sup>10</sup>。

加えて18世紀後半の西欧には、古代ギリシア文化を高く評価する親ギリシア主義 (philhellenism) が盛んになり<sup>11</sup>、古代ギリシアへの憧憬とすら言える強い関心が広く喚起されていたことも見逃せない。その潮流があつてこそ、ゲーツムーツも自著に古典古代の著作からの引用をふんだんに盛り込んでいったのである。ゲーツムーツ自身も『青少年の体育』の中で、オリンピックの栄冠と榮譽について述べる際に、それに感激するのは「〔古代ギリシアの〕心酔家」だからというわけではないと述べているが<sup>12</sup>、それはつまり自分はその心酔家であるという表明だと解釈できるだろう。

ゲーツムーツは、同時代ドイツの主に裕福な家庭の子どもの教育に目を向け、「われわれの教育 (unsere Erziehung)」では、子どもは生まれてすぐに「瀕死の重病人 (Todkranke) のように扱われるのだが、それによってはたして健康 (Gesundheit) を失わないものであろうか」という疑問が湧いてくる<sup>13</sup>。かくして、「身体を駄目にしないよう」として、彼らの身体はかえって駄目にされている」と言うのである<sup>14</sup>。上層階級に顕著な、精神の育成ばかりに気を配る教育の頹廢を指弾し、このような「われわれの教育」の墮落と対比させるかたちで、あるべき教育の姿を次のように述べる。

10 イマニュエル・カントもまた、ルソーの強い影響の下、次のように身体訓練の意義を主張している。「まず最初に行われるべきことは〔身体的〕訓練 (Disziplin) であつて、知識 (Information) の伝達ではない。」Kant (1964) S.727-728, 加藤訳 264 頁。亀甲カッコは加藤による。

11 その思潮については、師尾晶子による第一章を参照。さしあたり本章では新ギリシア主義を、19世紀のギリシア独立より以前の、典型的にはドイツの美術史家ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン (Johann Joachim Winckelmann, 1717-68) をはじめとする18世紀後半からの古代ギリシア文化を評価する流れとして捉えておく。Valdez (2014) p.6 では、繊細で自然なヘルダー的指向と高貴で英雄的なヴィンケルマン的指向とが指摘され、ドイツの新ギリシア主義について18世紀後半から考察している。Valdez (2014) p.5-25. また Marchand (1996) はシラーの詩「ギリシアの神々」から説き起こすが (Marchand (1996) p.1)、出発点としてのヴィンケルマンについては「禁欲」という点で論じている。Marchand (1996) p.7.

12 「もし、オリーブの枝、または松の枝の花冠によって、全民族の青少年が、……体力と男らしさを獲得するように励まされていたのだとすれば、そのことで何か胸がいっぱいになるのは、何も〔古代ギリシアの〕心酔者 (Schwärmer) だからというわけではなからう。」GutsMuts (1793) S.57. 成田訳 83 頁。

13 GutsMuts (1793) S.3. 成田訳 24 頁。

14 GutsMuts (1793) S.3. 成田訳 24 頁。

今こそ、まだかよわくても、子どもの身体 (Körper) を一日の大部分を戸外で、暑さや寒さの中で、風や雨の中で訓練し (üben)、天候の影響に対して鍛錬する (abhärten) 時である。子どもの四肢を熱心な運動 (Übungen) によって、すなわち歩・走・跳・投等々によって強化し (stärken)、子どもの魂 (Seele) の中に勇氣 (Muth) や恐れを知らない心 (Unerschrockenheit) や活発さ (Thätigkeit) の芽、および自然 (Natur) の事物についての思考 (Denken) の芽をさそい出すべきである。<sup>15</sup>

引用文中の原語を付した語だけ抜いてみるなら、身体を訓練し、鍛錬し、運動によって強化し、勇氣や恐れを知らない心や活発さや自然についての思考の芽を、魂に誘い出すべきだ、ということになる。訓練・鍛錬をとおして、健全な精神と健康な身体の両者をとともに成長させる教育を目指した一節と言えるだろう。そして、その基盤となるのは「健全な精神」ではなく、「健康な身体」の方であった。

われわれはあたかも身体 (Körper) など持っていないかのように、すべて魂 (Seele) の形成だけを意図している。しかしながら、われわれ一般の人間は、なお特に洗練された人間 (Verfeinerten) ほど、きわめて多く身体に依存しているものである。……われわれがこの身体を訓練 (üben) しなければ、一体身体に何ができるであろうか。<sup>16</sup>

そこで必要なのは、「学校 (Schule)」の中に「身体形成 (Körperbildung)」を取り入れることである<sup>17</sup>。そして「訓練」によって「健康な身体」の形成を図り、それを通して人間社会を形成することが理想として掲げられていく。

この「健康」については、グーツムーツがさまざまな養生論や医学的知見を引きながら述べているように、「病氣」の対概念として想定されていることは確かである。しかしそれにとどまらず、むしろ重視されているのは「軟弱さ (Weichlichkeit)」の対概念<sup>18</sup>とし

---

15 GutsMuts (1793) S.4. 成田訳 25 頁。

16 GutsMuts (1793) S.5. 成田訳 26 頁。

17 GutsMuts (1793) S.6. 成田訳 26 頁。

18 グーツムーツは「軟弱さ」の対概念として、以下の点を列挙している。「あまりに弱々しくなっているものを鍛えれば、力 (Kraft) や持久力 (Dauer) や鋭敏さ (Nevosität) や健康 (Gesundheit) や活発さ (Thätigkeit) や、そして、精神の強さ (Stärke des Geistes) が、生来の美しさ (ursprüngliche Schönheit) をもって再びわれわれから輝き出すであろう。」GutsMuts (1793) S.53. 成田訳 79 頁。

での側面であろう。臆病や怠惰を斥け、「俊敏」で「勇氣」や「活発さ」を持った「男らしい」青少年の育成——もっぱら男子が念頭に置かれている——のだが、健康はその「軟弱さ」を克服した一要素として位置づけられる。ここに、「健康な身体に健全な精神」が存するという——ユウェナーリスの語った元来の意味から離れて巷間に流布した——フレーズが、身体訓練を基盤とする人間教育の思想と結合して提示されていることを、確認することができる。

「俊敏さ」といった感<sup>レ</sup>覚<sup>レ</sup>的<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>もの<sup>レ</sup>まで含<sup>レ</sup>んだ<sup>レ</sup>広<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>身体<sup>レ</sup>訓練<sup>レ</sup>を、グーツムーツは汎愛派の流れを汲んで「体育 (Gymnastik)」と呼び、その普及を呼びかけていった。そして「ギムナスティック」という語に見られるとおり、この身体訓練による人間形成を基盤とした社会のモデルこそ、古代ギリシアなのであった。

### 3. 『青少年の体育』における古代オリンピック叙述の改訂

#### 3.1 オリンピック競技会への注目

グーツムーツは『青少年の体育』の第4章を「体育の提案——障害」として、自らの提唱する「体育 (Gymnastik)」の理想と、それに対して人びとが抱くであろう疑義（つまり体育を推進する上での障害）への反論を記している。第4章の構成は、前半で「軟弱化」に対抗する「身体訓練」「体育」が推奨され、後半で、予想される具体的な疑義とそれへの反論がカテキスムス風に述べられる形を取っている。前半でグーツムーツが「体育」を推奨するにあたり、紙幅の多くを割いた<sup>レ</sup>具体的<sup>レ</sup>事例<sup>レ</sup>こそ、古代ギリシアの身体訓練、とりわけオリンピア競技会であった。本稿では、グーツムーツがオリンピックに単に言及したにとどまらず、多くの紙幅を割いたということについて、立ち止まって考えてみたい。

詳細な記述に先立ち、グーツムーツはまず古代ギリシアについて次のように示唆する。（これ以後の『青少年の体育』の引用で《二重山カッコ》で括った箇所は、グーツムーツが改訂第二版で削除した箇所であることを示す。）

《洗練された18世紀の末に、私は同時代の人びとに、日常的なものを好む人びとがそれをいかに受け入れるかにわずらわされな<sup>レ</sup>いで<sup>19</sup>、盛んであった古代と不当な忘却の時

---

19 つまり、日常的な物事の流行を追うことにあくせくすることなく、という意味。



代を経て、再び生まれたある一つの事柄を、あえて推奨したいと思う。……これによって、流行や上品な作法 (Mode und feiner Ton) は、最後には屈服するにちがいない。》<sup>20</sup>

ここで (1) 盛んだった神話的段階、(2) 神話の忘却の段階、そして (3) 再生し盛んに実施された歴史段階という三段階を経た「ある一つの事柄」が他ならぬ古代オリンピック競技祭であることが、後の記述で明らかにされる。グーツムーツは身体訓練の精華たる公的な祭典を、頽廃したと映る「洗練」された 18 世紀末に流行や作法にかまけて健康な身体への配慮を置き去りにしている同時代人たちに推奨するのである。

《これまでわれわれが彼らに倣って喜んで自分たちを陶冶してきた二つの偉大な国民は、よく知らない人や機知に富む人の嘲笑や軽視を圧倒する重みを体育訓練 (gymnastische Übungen) に与えている。その国民とは、ローマ人と、特にギリシア人とであった。》

素晴らしい民族よ！ ……あなたの身体と精神 (Körper und Geist) の関係は今もなお生きており、永久に生きるであろう。われわれの精神はあなたによって形成されているのに、あなたがたの身体の維持と美化のためにわれわれに与えた教えを、われわれはなぜ重視しなかったのだろうか。体育訓練 (Gymnastische Übungen) は、あなたのところでは青少年教育の重要な部分を構成しており、身体の鍛錬 (körperliche Abhärtung)、強化 (Stärkung)、器用さ (Geschicklichkeit)、美しい形成 (schönere Bildung)、勇気 (Muth)、危険の際の沉着 (Gegenwart des Geistes in Gefahren)、その上に作られた祖国愛 (Vaterlandsliebe) がその目的であった。<sup>21</sup>

「特に」ギリシア人を自分たちの自己陶冶にとって倣うべき模範と位置づけ、「素晴らしい民族」と誉め讃える。なぜならそこでは、「身体と精神」——精神と身体ではなく、優先されるのは身体の方である——の関係が精神のみに偏らず、身体訓練を基礎としていたからである。精神と身体が並列に置かれているように見えるが、グーツムーツが重視するのは、身体訓練を基盤とする考え方であった。それは、18 世紀末の洗練した人びとが古典古代の精神を継承する方にばかり意を注ぎ、その身体に関する教えを受け継がなかった

---

20 GutsMuts (1793) S.55. 成田訳 80 頁。先に触れたが、引用注の下線は引用者の強調。

21 GutsMuts (1793) S.56. 成田訳 80-81 頁。《 》内は第二版で削除箇所。

という歎きによく現れている。「青少年教育の重要な部分」であったというその教えの「目的」について、鍛錬、強化、器用さ、美、勇気、沈着などのキーワードを列挙した上で、最後にそれらに立脚した「祖国愛」に言及している。

ここでグーツムーツがあげる体育訓練の目的の一つに、ただ強さのみでなく、「美」の項目があることは、古代ギリシア世界を踏まえた身体観として注目しておきたい。それは軍事教練で鍛えられた、まさに「青少年」と言える「エフェボス(壮丁)」の若き「健康美」を想定することができようが、ここであらためて本稿冒頭で引いた句に目を戻すならば、グーツムーツは、伝統的に「健康な身体に健全な精神」と表現されてきたところを「強力で(stark)健康な身体」における健全な精神、と表現していたのだった。健康に「強さ」をつけ加えたグーツムーツの意図は、まずは「健康」概念の強調と理解できるが、それだけにとどまらず、多義的な「健康」の含意を「強さ」の面で強調したものと言うことができる。その場合、強さは健康の一部というより、「強さ」こそが「健康」のコアだという示唆を読者は読みとることになる<sup>22</sup>。

### 3.2 『青少年の体育』とオリンピックの叙述

オリンピアに集う大群衆の姿を思い浮かべ「胸をいっぱい」しながら、グーツムーツは、古代オリンピックの様子についてじつに詳細な描写を行っている。その記述は競技が開始される前の、オリンピックの準備から始まっている。以下、その特徴的な部分について考察を加えながら見ていくことにしよう。

(1) 〈大群衆〉 古代オリンピックについてはじめに言及されるのは、先に触れた「われわれの想像を超える」という、オリンピアへ殺到する大群衆についての記述である。この「殺到」に注目することは、グーツムーツがオリンピックの何に注目したかを考えるうえで重要である。というのも、それは古代オリンピックにおける競技の説明なのではなく、筆者であるグーツムーツ自身が想像した、イタリアなど遠方に住む者やギリシア全土から、体育の祭典に心躍らせながら集結し、人びとが興奮していることの描写だからである。多くの人が集い、興奮し、熱狂する。それは、いかに古代ギリシアにおいて「体育」が重視されているかの証しでもある。大群衆への注目にはそうした意味合いが込められているだろ

---

22 もちろん stark の語も多義的であって、身体的な強さだけでなく、精神的な有能さ(たとえばチェスが「強い」のも stark)も意味しうる。

う。師尾晶子によれば、当時の競技場の観客収容人数は4万人から4万5千人ほどであったという<sup>23</sup>。

ここで想像された輝かしい光景への憧憬が、18世紀末のグーツムーツに「国民祭」という希望を抱かせることとなる。これも新ギリシア主義的発想の一環と言うこともできようが、グーツムーツの場合、その関心が「身体」の「訓練」へと収斂していく点に特徴がある。

(2) 〈歓声と興奮〉「歓声」も含めて、グーツムーツのオリンピック記述は、音をたくさん盛り込んでいる点が大きな特徴である。(1)で触れた大群衆と同様、これは『青少年の体育』のなかでオリンピックの記述部分にのみ見られる特徴的な点である。

そこは声や音にあふれている。「《馬はいななき、凱旋車がガタガタと音を立てて走っていた》」という描写、競争者を呼び集めたり競争者の氏名や出身を知らせたりする「《呼び出し》」の声、かつての大会で名を馳せた者の呼び出しに「《みんなの声は一つになって、かつての大喝采が繰り返された》」、さらに「《ラッパの合図が鳴り響き》」競技がなされ、8人の審判者によって勝者が決められれば、またも「《呼び出し》」がその勝者の名を告げて、「《多くの人たちが繰り返しその名を叫んだ》」と記述される<sup>24</sup>。さらに、最終日の段に到っては、勝者たちは8人の審判たちに続いて「《笛の中を進んだ》」、 「《呼び出しが勝者の名を告げるまで、勝者の賛歌と音楽が交互に奏でられた》」、オリーブの冠が授けられると「《皆はいっせいに勝者への最大の共感と喜び、喝采と驚嘆の声をあげた》」という具合である<sup>25</sup>。

これら群衆の歓声や喝采、呼び出し人の大きな声、ラッパの音、賛歌・音楽など、さまざまな音が、この祭典に集う人びとの感動と熱気を見事に伝えている。「《彼らの喜びはほとんど陶醉に近かった》<sup>26</sup>」と記すグーツムーツ自身がオリンピックに半ば陶醉しながら記しているかのようである。

この臨場感あふれる記述は、古代オリンピック競技会が単に勝者を定めるためだけの競技会なのではなく、そこに集った人びとの賑わいによってこそスペクトル性をおびて人を

---

23 師尾晶子 (2004) 90 頁。

24 GutsMuts (1793) S.58-59. 成田訳 84-85 頁。

25 GutsMuts (1793) S.59. 成田訳 85 頁。

26 GutsMuts (1793) S.59. 成田訳 85 頁。

「陶醉」へと誘い込む祭典だということである。それは人びと、社会全体が身体訓練の価値を認め、その訓練によって鍛え上げられた者同士が闘って勝敗を決することの価値を認めている証しである。逆に言えば、この社会の後押しがあってこそ、オリンピックは成立するのである。誰も人が集まらなければ、競技者がオリンピアにまではるばるやって来る時の安全保証としてのエケケイリアも必要ではないのだ。

この音の描写には、古代オリンピック競技会を通したグーツムーツの理想が語られていると考えられるのである。

(3) 〈花冠の名誉〉 グーツムーツは資本主義の問題を、身体との関わりで、とりわけ「貧民」の子どもたちが生活苦のために奴隷労働に等しい重労働に従事させられ、身体にも精神にも障害を負わされる現状を憂えていた。そのことを踏まえるなら、経済的褒賞ではなく——あるいはそれを「必要」とせずには貨幣価値とは異なる価値をもつ——オリーブ冠に名誉を見出せるような社会状況を一つの理想とみなしていた、と考えてよいだろう<sup>27</sup>。身体訓練の問題を、身体機能の向上といった点で検討するのではなく、精神との関わりで捉え、かつ社会全体の問題として捉えて必要性を訴える点にグーツムーツの思想性がある。その用語を用いていることから「市民社会」思想の系譜に連なると言えるだろうが、しかしその後の思想史は、いわゆる市民社会思想の展開において「体育」「身体訓練」を主題とすることはなかった。ようやく、現代のオリンピックの諸問題があらためて社会と身体との関連を考えるよう促すに到ったと言っても過言ではない。

(4) 〈エケケイリア〉 オリーブ冠の名誉についての言及につづき、いわゆる「聖なる休戦（エケケイリア）<sup>28</sup>」について触れている。前者は経済的褒賞からの距離化であり、後者は軍事的争いからの距離化だといえるだろう。

《この競技に対するエリス人の準備の期間に、ある重大なことが通告された。すなわち、

---

27 もちろん社会経済的な見方は一つの見方に過ぎない。村川堅太郎は宗教的な面から読み解いて見せている。「オリンピアに自生していたオリーブは、アテネの『神聖なオリーブ』よりももう一段尊重されて、枝を剪ることも禁じられていたと想像してはいけないだろうか。オリーブの枝という三文の値打ちもないものが最高の荣誉とされた由来を考えると、このような想像もめぐらしたくなるのである。」村川（2020）114頁。なお、師尾は「神域に生えた聖なるオリーブの枝でつくられた」と述べている。師尾（2004）101頁。

28 ただしグーツムーツは「エケケイリア」の語を用いていない。

すべての戦闘的な敵対行為は延期され、いかなる軍事集団もこの地の聖域に足を踏み入れることは許されなかった。》<sup>29</sup>

もちろん時間を追って順序立てて記述するならば、オリンピックの各種競技の以前から始めることになろう。各地からの人びとの集結、そして聖なる休戦の告知、という順で言及が始められることは特に驚くことではないかもしれない。しかし、事柄自体が重要なことだし、グーツムーツもそれが「ある重大なこと」であると認識しそう記して注意を促している点を強調しておこう。エケケイリアは、クーベルタンの主導による近代オリンピックが「平和の祭典」を掲げたことと関連づけられがちだが<sup>30</sup>、グーツムーツがここで「平和」をどのように思想的に展開しているのかは、この短い一句だけからは不明である。全体として『青少年の体育』（初版）では、軍事教練としての体育という視点は前面に出てはいない。そこで批判対象は現実政治にあったわけではなく、くり返し触れているように、座学・理性中心の啓蒙主義的な教育であり、身体活動を抑制する敬虔さであった。戦争でも平和でもなく、「健康」で「健全」な青少年の育成という理想が、実践の裏付けをもって述べられているのである。

(5) 〈2つの神殿と女性の競技〉 後に宗教性について触れるようにグーツムーツは「ゼウス神殿」に触れているのだが、正確に言うとグーツムーツはここでローマ神「《ジュピターの荘厳な神殿 (Jupiters prächtiger Tempel)》」と述べている<sup>31</sup>。同様にヘラ神殿についてもローマ神の「《ユノ神殿 (der Tempel der Juno)》」と述べる。古代ギリシアについて述べる段でローマ神名を用いているのだが、ここで注目しておきたいのは、グーツムーツ

---

29 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83 頁。

30 エケケイリアについては師尾晶子 (2004) の記述が示唆に富む。なかでも「古代のそれは、まさに現実的な必要性から実施されたわけであり、近代のスローガンとは大きく異なるものであったことに注意する必要がある」という指摘は重要である。師尾 (2004) 80 頁。やや古くなるが、村川堅太郎の記述も興味深い。村川 ([1963]2020) 149-156 頁。「分立抗争の時代に、よくもオリンピックなどが成立したものとすら思われる。それは要するに、古代人にとっての宗教とか祭典のもっている意味や魅力を抜きにしては考えられない。民族の神々のうちの主神の、それも毎年はない大祭、そうでなかったら、たとえばクーベルタンのような人が現れて平和のための民族的競技をいかに説いて廻っても、だめだったのではなかろうか。」村川 ([1963]2020) 149-150 頁。

31 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83 頁。

ツが女神であるヘラの神殿での競技会に言及していることである。

《ここにはまたユノの神殿〔ヘラ神殿〕もあった。その側ではその地域の娘たちがこの女神の祭典の時に競争をした。》<sup>32</sup>

著作全体の基調は「男らしさ」を強調しているのを見逃してしまうが、グーツムーツがこの時代に女性の「体育」も視野に入れていたことは注目に値する。ヘラ神殿で行われた女性のための競技会であったヘライア祭は、未婚の女性のみによる短距離走のみの競技会であった<sup>33</sup>。師尾によれば、参加者は全ギリシア的なものだったか、それともエリス地域からの参加だったのかは不明とのことだが、「現実にはオリンピアの周辺の少女が参加する程度であったろう」と推定されている<sup>34</sup>。

そのような「女性」への視点で読み返してみると、グーツムーツがところどころで女性の身体や体育について言及していることに気づく。たとえば「真の美」を損ねる要因の一例として衣服をとりあげ、次のように指摘する。これは同時に「健康／健全」についての例でもある。

私はコルセットについて触れたくはないのだが、健全な理性（der gesunde Menschenverstand）によって、この恐ろしい流行からすぐに完全に解放されることを期待する。<sup>35</sup>

この時代に流行した女性のコルセットの締めつけの極端さはよく知られているが、「健全な」理性によって、女性の健康な身体活動が取り戻されるよう、グーツムーツは同時代の流行（Geschmacke）批判をしているのである。

また後述するように、ヴェルリッツ（Wörlitz）での「あたかもオリンピック競技を再現する」かのごとき競技会について感激的に記す際には、次のように女性の競技参加に言及している。

---

32 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83 頁。

33 師尾 (2004) 104 頁。

34 師尾 (2004) 105 頁。

35 GutsMuts (1793) S.90. 成田訳 117 頁。

少年、小さな少女、若者や娘たちが (Knaben, kleine Mädchen, Jünglinge und Jungfrauen)、かわるがわる勝利を争って徒競走 (Wettlaufen) に奮闘する。<sup>36</sup>

ここでは男女が「かわるがわる」走るのであって、競技会は男性だけのためでも、女性だけのためでもないことが注目されている。グーツムーツがこのような事例を感激して取り上げていることは、「男らしさ」をしきりに強調する著作のなかで、ふっと視野が広がっていく部分である。

(6) 〈祭典の開始〉 さて、いよいよ祭典の開始に記述が入っていく。まず「《祭典は夕方始まった》<sup>37</sup>」と述べ、薄暗がりへと読者の想像を誘う。そして「《花環や葉環で飾られた多くの祭壇は、供儀の動物の血でうるおいを与えられた》」、それによって「《人々は夜半まで神をあがめた》」と述べられる<sup>38</sup>。先に宗教性について述べた際にも触れたが、古代ギリシアの競技祭について、その宗教的性格をグーツムーツはあまり強調しない。ただ「供儀」「血」「夜半まで」といった語句によって、短いながらもこの一節は夕暮れ時から夜半までの儀式を経て競技へと入っていく、臨場感あるイメージを喚起させる記述となっている。

それに引き続き、またもや「群衆」に目が向けられる。「《何と多くの群衆が徐々にこの地を埋め、歓呼の声や叫喚の声が昇る太陽を歓迎したことか》<sup>39</sup>」。先述したように、この「群衆」の存在と「歓声」こそ、古代オリンピックに対するグーツムーツのイメージの基礎であり、評価のポイントである。なぜならそれが、公的施設の建設と同様に、社会が体育競技会に価値を見出していることの証しとなるからであり、一つのスペクタクルを構成する重要な要素だからである。社会が一体となって体育を支持している古代ギリシアの状態は、グーツムーツの理想を体現したものであった。

(7) 〈競技〉 オリンピックについてのまとまった叙述の中で、グーツムーツは競技そのものについてはあまり言及していない。種目についても、初日について、はじめに徒競走

---

36 GutsMuts (1793) S.62. 成田訳 88 頁。

37 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83 頁。

38 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83-84 頁。

39 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 84 頁。

があった後に他の種目が行われたと述べ、翌日から「《戦車競争、レスリング、その残酷な変種であるボクシング、円盤、跳躍、その他が行われた》<sup>40</sup>」と述べるにとどまっている。

もちろん競技の仕方についての近代と異なる大きな特徴である、衣服を脱いだこと（裸になること）や体に油が塗られたことに触れてはいる<sup>41</sup>。しかし、具体的な競技の種目や競技方法については、オリンピックという観点からはほとんど触れていない<sup>42</sup>。

これは一見意外なことではある。しかしグーツムーツは、古代ギリシアのオリンピックを模倣しようとしているわけではない。競技をそっくり真似することではなく、そのエートスを社会に根づかせ、自分たちの社会に相応しい仕方ですべてを普及することが、彼にとって重要な課題なのである。競技会は、「健康な身体」を形成し「健全な精神」を涵養する「体育」普及のための一つの手段なのである。

その考え方は、後段の第二部（第7章）で、エウリピデスの「《ギリシアの数多くの悪害の中で最大のものは競技者共である》」という競技偏重への批判に言及していることにも窺える（初版）<sup>43</sup>。そうして、それらの競技批判のなかから次の命題を抽出する。

《生きるために体育をしなさい。だが体育をするために生きてはならない。後者すなわち体育をするために生きていたのは競技者（Athleten）で、セネカによると彼らはひたすら「神と酒の間で過ごしている」人びとであった。》<sup>44</sup>

グーツムーツは強調体にして、体育（Gymnastik）を「生きる（leben）」ためのものと言っている。それは、生活（Leben）をすべて体育に注いで人生（Leben）を体育に捧げるような生き方に対する、セネカに仮託したグーツムーツの批判とみてよいだろうし、イギリス由来の「スポーツ」に対する批判を読むことも可能であろう。グーツムーツの体育は「健康な肉体」と「健全な精神」に向けられており、競技それ自体に生活と人生を捧げ

---

40 GutsMuts (1793) S.59. 成田訳 84 頁。

41 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 84 頁。

42 ただし、個々の競技という視点からは、たとえば跳躍や五種競技などの記述の中でしばしば古代ギリシアの例に触れている。

43 GutsMuts (1793) S.105. 成田訳 134 頁。この部分は改訂で削除された。

44 GutsMuts (1793) S.105. 成田訳 134 頁。この部分は改訂で削除された。



るようなものとして構想されてはいないのである<sup>45</sup>。

(8) 〈宗教性〉『青少年の体育』という著作そのものは、身体訓練について、訓練の種類から器具、教え方、訓練時間など、身体訓練の方法を体系化したものであり、全体として宗教から距離を取った著作である。しかしそれはむしろ、新たな「宗教性」へと接近していると言えるのではないか。そう思える箇所が、まさに古代ギリシアの競技会についての叙述にうかがえる。

ゲーツムーツが重視したのは、とくにオリンピアでの祭典であった。ここまで見てきたように『青少年の体育』では古代オリンピックの様子が、とくにそこに集った人びとの息づかいまで詳細に記述されているのだが、その最初と最後に、供儀に関する記述が置かれている。いわば犠牲に始まり、犠牲に終わるのである。もちろん古代の競技祭は、オリンピア祭にせよイストミア祭にせよ、前者がゼウスに、後者がポセイドンに捧げられた祭典であったように、そもそも「宗教儀式」としての性格をもつものだった<sup>46</sup>。

古代ギリシアにおいて、身体訓練を高めるために公的に専門の教師が任命され、そのための目を見はるばかりの見事な公共施設が建てられたことが、(ゲーツムーツ言うところ

---

45 競技に偏重した人生観は、身体を競技のために細分化して見る身体観となるだろう。それは、歪められた人間観に通じている。ホルクハイマーとアドルノは次のように指摘する。「あちら〔亡命先のアメリカから見た大西洋の向こうであるヨーロッパ〕で肉体を賞めそやす体操や陸上競技の選手たちは、昔から死体に対してもっとも親近性を持っていた。それは自然愛好者が動物を狩ることに親近性を持つと同じである。彼らは身体を、動く機械、組み立てられた部品とみなし、肉体を、骸骨を包むクッションとみなす。彼らは身体やその部分を、すでに自分から切り離されているかのように取り扱う。ユダヤの故知は、人間を寸法で測ることへのためらいを教えている。なぜなら「死体は——棺桶に合せて——測られる」からだ。ところが、それこそ身体の操作者たちがよろこびとする事なのだ。彼らは、それと気づくことなく、棺桶作りの目つきで他人を測っている。測定の結果を発表して人間を高いとか低いとか、肥っているとか重いとか呼ぶとき、彼らの正体が現れる。病気に興味を持つ彼らは、食事をするにしても、同じ食卓についている人の死を、すでに見てとっている。相手の健康を気遣ってのことだ、という釈明はあまり当てにならない。言葉も彼らに歩調を合せる。彼らにかかると散策は運動に料理はカロリーに変えられてしまう。……社会は死亡率によって、生を化学的過程に引き下してしまう。」Horkheimer & Adorno (1947) S.249-250. 徳永恂訳 (2007) 485-6 頁。

46 村川は次のように述べる。(ポリス同士の)「分立抗争の世界に、よくもオリンピックなどが成立したものとすら思われる。それは要するに、古代人にとっての宗教とか祭典のもっている意味や魅力を抜きにしては考えられない。」村川 ([1963]2020) 149 頁。

の) 体育への社会的評価の証しであった。

精神の運動と結合していたこの訓練の公的な祭典、すなわち、いわゆる公的なオリンピア・イストミア・ピュティア・ネメア競技会は、単なる競技会ではなく、民族の崇高な意志を神に捧げるものであり、宗教 (Religion) さえあがめたのであった。この大祭典への人びとの殺到は、われわれの想像を超えるものであった。<sup>47</sup>

ここでグーツムーツは、いわゆる四大競技会を「精神の運動」と「訓練」とを結合させた「公的」な「祭典」と特徴づけている。

精神と結合している「諸訓練 (Übungen)」というのは、実質的には身体訓練を意味している。そうであるなら、この見解の背後にまたもや「強く健康な身体に健全な精神」という句の響きを聞き取ることも許されるだろう。ただし、より直接には、精神と肉体の結合を見出したのは「健康」ないし「健全」をめぐる思考からというよりも、むしろ具体的な、古代ギリシアにおいて公共施設のもった性格についての認識からである。すなわち「ここには、思想を交換するために演説家や哲学者が、勉強し身体を訓練するために (um zu lernen, und um sich körperlich zu üben) 青少年や男たちが、自らの卓越性を示すために競技者 (Athleten) が、運動によって強くなるために病人や虚弱者が、……姿を見せた」という認識にもとづいているのである。身体訓練のためのみの場なのではなく、演説をしたり哲学者が議論を交わしたりする、ギリシア全土から人が集まるまさに公的な場の重要性を讃えると共に、その重要な公共施設の中心行事が体育競技祭であることに注目しているのである<sup>48</sup>。

---

47 GutsMuts (1793) S.57. 成田訳 82 頁。

48 村川堅太郎によれば、評論家や詩人、さらには画家や彫刻家などにとって「人の集まる祭礼が自己宣伝のもっともよい場所」であり、「祭礼中の祭礼たるオリンピアの祭典が絶好の機会」であった。村川 ([1963]2020) 200 頁。オリンピック競技会は、もっとも有名な祭礼であって、単に体育競技会以上の社会的機能を持っていたのである。それはグーツムーツも指摘する群衆の殺到という事態と相まって、大きな効果を持ち得たであろう。たとえば演説家は自説を広める機会として、詩人や作家、彫刻家たちは自己の作品を知らせ、販売し、名声への足がかりとできる期待が持てただろう。またブルクハルトによれば「オリュンピアはとにかく依然として、それこそ普遍的にギリシアに知れわたっている唯一の場所であって、この点では、デルポイもそれに取って代わることはできなかった」とされ、「すべてのギリシア人に何事かを知らせようと思った者は、オリュンピアにみずから現れるか、でなければ碑銘をつけた芸術作品を寄進しなければならなかった」。Burckhardt (1978) 新井訳『ギリシア文化史 6』ちくま学芸文庫、256-257 頁。

引用箇所でグーツムーツは「宗教」に言及し、オリンピアという場所が「美しい所であり、宗教と民族精神 (Religion und Volksgeist) によって、この地は人々の心を強く打つ<sup>49)</sup>」と述べ、ゼウス神殿の大きさや荘厳さなどにも言及してはいる。しかし実際のところ、オリンピック競技会の「宗教性」をそこまで強調しているとは言い難い。最初と最後に触れてはいても、祭礼にまつわる供儀の詳細に触れていないことにもそれは現れている。

オリンピックにおける牛の供儀は盛大であって、たとえば村川堅太郎などはそこに多くの紙幅を割いているのだが<sup>50)</sup>、グーツムーツはわずか一言、「《花環や葉環で飾られた多くの祭壇は、供儀の動物の血でうるおいを与えられた》」と記すのみである<sup>51)</sup>。さらに、古代ギリシア・ローマの宗教は「《われわれの精神はもとより、われわれの宗教にはなおいっそう適していない》」と述べて、それゆえにこそ「《われわれの青少年の身体と精神に力と男性的精神をもたらす》<sup>52)</sup>」ことを目指している。

宗教から距離を取り始めた時代に生きたグーツムーツ<sup>53)</sup>は、宗教性をともなった古代ギリシアの純粹模倣を指向したのではなく、古代ギリシアの身体訓練の精華たる競技会、とりわけオリンピアでの競技会の開催を、18世紀末ヨーロッパ（とりわけドイツ）において身体訓練、身体教育を重視する模範としようとしているのである。

ギリシアの果てから、人びとは陸路や海路で、ペロポネソスの最も美しい地、エリスのこの肥沃な楽園に殺到した。ヘラクレスがかつて創設し、長い中止の後、リュクルゴスとイフィトスが再興した聖なる競技会に参列するために、シチリアやイタリアや小アジアからさえ、また特に本土からオリンピアに旅をしてきた大群衆がここに見られた。<sup>54)</sup>

このように強調される群衆の殺到と熱気に加えて、先に引いた祖国愛へ通じる「目的」を踏まえるなら、オリンピックの祭典が持った以下に引用した部分にグーツムーツが力を

---

49 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83 頁。

50 村川 ([1963]2020) 参照。

51 GutsMuts (1793) S.58. 成田訳 83 頁。しかもこの記述は第二版で削除されたのである。

52 GutsMuts (1793) S.61. 成田訳 86 頁。この記述は第二版で削除された。

53 グーツムーツは、敬虔さを失い見かけだけの信仰になっているこの時代の upper class にこう呼びかける。「宗教的な寄進に対する信心深い慈善心は、迷信とともに一部消失した。高貴な人々よ、あなたがたがもはや修道院に遺贈しないなら、故郷の町の青少年に遺贈し、ランプサコスのアナクサゴラスのように、記念となるものを創設しなさい。」GutsMuts (1793) S.56. 成田訳 81 頁。

54 GutsMuts (1793) S.57. 成田訳 82 頁。

込めていることが分かる。

ここでは、しばしば王たちも市民と花冠をかけて競技をした。そしてこの花冠には、市民の心からの尊敬と不滅の名誉だけでなく、同時に祖国とその子どもたち [=市民]の自由、祖国の祭日の有益な活用<sup>55</sup>、個々の家庭の幸福、とにかくギリシア人が彼らの神に願ひ得た最も美しく、最も善いものが編み込まれていた。<sup>56</sup>

「市民 (Bürger)」と「祖国」への言及が目立つことに、汎愛派の流れを汲むというだけにとどまらない、18世紀末にフランス革命の影響を受けたグーツムーツの思想を見ることができる。彼は、王と市民が実益ではなく花冠をかけて競ったことに、祖国とその子どもたる市民の「自由」を見出す。『青少年の体育』の冒頭で「われわれの市民社会 (unsere bürgerliche Gesellschaft)<sup>57</sup>」というとき、そのような世界が念頭にあったのではない。花冠は、祖国と市民にとっての名誉と自由のシンボルなのである。

こうして古代オリンピックの興奮を想像し、その感激に半ば打ち震えながら、グーツムー

55 ここで「有益性」を強調した点は、汎愛派の中心であったバゼドウ (Johann Bernbard Basedow, 1723-1790) の「必要」の観点に基づく教育思想の継承とも考えられる。グーツムーツによるバゼドウへの高い評価は『青少年の体育』にも見られる (GutsMuts (1793) S.31. 成田訳 54 頁)。『青少年の体育』の記述に内在するならば、たとえば「怠惰」「無為」を排し「活動性」の涵養を重視した記述に注目できよう。「祭日」をどう過ごすかという問題は、当時の若者がなにもせずぶらぶらと無為に過ごすことを問題視するグーツムーツにとって、彼らを体育訓練によって目ざめさせる重要な点であった。「安楽を好む多くの者たちは、この自由時間を気持ちよく何もしないで過ごしたり、人を訪問したり、父親の家での娯楽や公共の祭りや談話や馬鹿げた話や愚にもつかない読み物で浪費している。多くの者たちは、生まれつきのんびりしており、その身体と精神にすでに年をとった者の無気力な怠惰がやどっている。彼らは芽が出、花が咲く大切な時期をぼんやり過ごし、むさぼり食っている。」だから彼らを「つかまえて、身体的に目ざめさせよ」と述べている。GutsMuts (1793) S.6. 成田訳 27 頁。バゼドウの汎愛教育については、寺田光雄 (1996) 33-56 頁を参照。寺田は、身近な経験世界をはるかに越えた世界について多くの情報を提供するバゼドウの『初等教科書』と、ロホウの『子どもの友』とを具体的に比較し、18世紀ドイツにおいて民衆啓蒙教育がもった機能と限界を考察している。グーツムーツの『青少年の体育』も、身体訓練という視点から「教育」を問いかけるものであり、教育という領域において「体育」「身体」「健康」(さらには「衛生」「生と死」など)といった問題を歴史的・社会思想史的に考察する上で重要なテキストだと言えるだろう。

56 GutsMuts (1793) S.57. 成田訳 82-83 頁。

57 GutsMuts (1793) S.1. 成田訳 22 頁。

ツは体育競技、体育教育が、勇気や頑健さや健康を市民一人一人に育むという意義を超えて、祖国愛を喚起することの意義を主張している。

ただし、それを「祖国愛」に一元化するナショナリズムと一括するのは早計だろう。この時点で主張されている「自由」が、フランス革命の響きを湛えていることにも注意しておきたい。ここでの「自由」は、祖国の自由であるだけでなく、市民の自由としても語られている。その点は、上品さや作法を重視して「健康な身体」を重視しない、貴族的な「洗練」による「軟弱化」を批判する基調とも合致する。グーツムーツがセンテンスを丸ごと強調した一文で「世界市民」の概念を用いていることも注目される。

若い世界市民 (*Weltbürger*) を、道徳的に善く存在し得るよう、できるだけ身体的にもそのように教育するということは、よりよいことではないだろうか。<sup>58</sup>

道徳的「善」と身体的「善」とを結合させるものとして、教育像の転換を推し進めようとしている。そのための「体育 (*Gymnastik*)」を、汎愛派の思想とその学校現場での実践経験、啓蒙主義思想、新ギリシア主義、当時の養生論や医学的知見、そしてフランス革命などの強い影響の下で構想している。身体を重視しない、理性偏重で貴族主義的な「洗練」と「軟弱化」へのグーツムーツの反発は、しかし、だからといって「自然」に委任状を与えるのでもない。それは「身体」に対して、意図的で計画的な、したがって合理的な「訓練」を「教育」によって養おうとするものである。自然を尊び、同時に教育を尊ぶ姿勢は、ルソーの強い影響をうかがわせるものである。

『青少年の体育』が、著作の半ば以降、第二部として、跳躍 (第7章)、走 (第8章)、投 (第9章)、格闘 (第10章)、登攀 (第11章)、平均の維持 (第12章)、持ち上げや縄跳びなど (第13章)、ダンス・歩行・兵式訓練 (第14章)、さらに第三部に、水泳 (第15章)、火事・不眠・断食の訓練 (第16章)、朗読 (第17章)、感覚訓練 (第18章) と章を立て、それぞれについて体系的かつ具体的に「体育」の方法を示していることは、ただ「自然」に任せるのではない、合理的な教育訓練によって「健康な身体」「強い身体」「敏捷な身体」を作りだそうとする企図だったことを示している。

第二部、第三部ともに、身体訓練を実施する上での具体面を詳細に記述した功績は大き

---

58 GutsMuts (1793) S.53. 成田訳 79 頁。

く、ゲーツムーツが「近代体育の父」と呼ばれる所以となっている<sup>59</sup>。なかでも第三部の独自性は注目に値しよう。たとえば当時は普及していなかった水泳をいち早く種目に取り入れたことや、火事の訓練や眠らない訓練、朗読、視聴覚や嗅覚・味覚等の訓練といった、現代のいわゆる「スポーツ」概念には収まらない幅広い「身体」の活動が視野に収められている。その原型が、ギリシアの身体訓練であった。その観点から「体育 (Gymnastik)」が体系的に構想されたことは、その後のフリードリヒ・ヤーンにも多大な影響を及ぼした。そのヤーンが提唱し、現代にまでつながっていく「体操 (Turnen)」を考える上でも、ゲーツムーツの「体育」思想の検討は重要であろう。

### 3.3 ヴェルリッツにおける「オリンピックの復活」

『青少年の体育』では、古代ギリシアのオリンピックの叙述に続いて、18世紀のドイツで、ルターで知られるヴィッテンベルクに近いデッサウ-ヴェルリッツ (Dessau-Wörlitz) にある「見渡せないほど広大な牧草地」で開催された体育競技会の模様が述べられている。これは1776年から1799年まで毎年、君主の妃の誕生日である9月24日に収穫祭を兼ねて開催され、周辺の村々の少年少女による徒競走や馬術の競技が行われていたものである<sup>60</sup>。

ゲーツムーツがこの競技会に言及したのは、第一には「古代のギムナシオンやパライストラやアンフィテアターのような壮大な建造物<sup>61</sup>」は不要だということを示すためであった。ヴェルリッツの競技会は、広大な野原で行われたからである。そして第二に、それを開催したのが君主であり、「われわれに全く欠如した国民祭にまで高める」ことの意義を主張するためであった。

この国民祭は、国民精神 (Nationalgeist) に作用し、民族 (Volk) を導き、彼らに愛郷心 (Patriotismus) を注ぎ込み、彼らの徳と正義を高揚し、ある高貴な感覚を最下層の階層にすら拡大する偉大なもの、感情を高めるもの、偉大な力というものを有してお

---

59 ヤーンが「近代体育の父」と呼ばれることもあるが、ヤーンはゲーツムーツの影響を受けているので、ヤーンを「父」とする場合にはゲーツムーツは「祖父」という位置づけになるだろう。

60 したがって『青少年の体育』刊行時にはまだ実施されていたことになる。いったん途絶えた後、1840年から1842年に短期間復活され、その後1992年から再び新たに開催されている。Hirsch, Erhard (1997) p. 265-288.

61 GutsMuts (1793) S.61. 成田訳 86頁。

り、私はこれを全国民 (eine ganzen Nation) の主要教育手段と思っているほどである。……民衆にのしかかっている負担を忘れさせる公共祭によって、人びとはどんなにしばしば不満 (Unwille) や謀叛心 (Empörunggeist) を鎮めてきたことか。<sup>62</sup>

本書はもともと民衆向けではなく、体育指導者向けの性格が濃い書物であった。君主に体育祭の意義を訴えるにあたり、公的に体育の祭典を開催することが民衆に鬱積する憤懣の鎮静に有益であると言う。その格好の例が、この競技会だというわけである。

グーツムーツはこの競技会について、「領民の大部分が大挙して押し寄せ (herbeiströmen)、あたかもオリンピック競技が再び復活するのを見るというのは素晴らしい光景だ<sup>63</sup>」と激賞している。彼はまず、その広大な美しい景色と君主の慮りを称賛した上で、古代オリンピックと同様に、大勢の人びとが集まってくる音のある情景を重ねて描き出す。

朝が来ると、領民がしだいにこのひなびた場所に殺到してくる (strömen)。あちらこちらから、あらゆる方向から、音楽 (Musik) が楽しげな村人の集団の接近を告げてくれる。首都の住民もこちらへ急いでくる。よその土地の人びとも押し寄せ、やさしい君主 (Fürst) 夫妻も愛する領民の群れの中に、親しく出かけていく。<sup>64</sup>

そして、10の村から選ばれた10人の少女が、その日が誕生日である君主の妃から「花冠」および総額150ターレルのお金と花嫁衣装が授けられる。そしてその10人の少女以外の青少年たちは、徒競走をするのである。それを観衆が見届け、勝者に妃から褒賞が下賜される光景をグーツムーツは描き出す。

人びとは丘のまわりに走路をとる。たくさんの観衆がそれを取り囲む。男の子 (Knaben)、小さな少女 (kleines Mädchen)、若者や娘たち (Jünglinge und Jungfrauen) が、かわるがわる勝利を争って徒競走 (Wettlaufen) をする。やさしい奥方様は、若者の努力に対し、男性や女性の勝者に自ら帽子や美しい織物を与え、労をねぎらう。間もなく、強壯な村人の集団が馬にひらりと乗り、同じような賞を獲ようと争う。《テン

---

62 GutsMuts (1793) S.62. 成田訳 87 頁。

63 GutsMuts (1793) S.62. 成田訳 87 頁。

64 GutsMuts (1793) S.62. 成田訳 88 頁。

トやあずまやの中にたくさん並べられたその地の料理を食べて、ごった返した群衆 (Menschengewühl) は元気を回復する。慈悲深い君主 (Fürst) はできる限りそれに対してころよく寄付をする。走路のまわりの場所は一つ一つの村に分けられていて、その分けられた場所のすべての区域で、音楽と歓呼の声 (Musik und Jauchzen) が鳴り響く。ダンスが始まり、日が傾くまで続く。建物や生け垣の燈火がたびたび終わりを告げ、合図が、満足した地方の人びとに、家路につくのを促すのである。》<sup>65</sup>

このように叙述した一日の光景を称賛し、青少年がこの日を待ち焦がれ、この日のために鍛錬することを誉め讃える。そこにグーツムーツが見出したのは、「勤労」と「従属」の精神の涵養だけでなく、「祖国への愛の高揚」であり、「君主への愛の鼓舞」であった<sup>66</sup>。もちろんここでの「祖国愛 (Liebe zum Vaterland)」とは、国民国家としてのドイツへの愛ではなく——それはまだ存立していない——、ここで「やさしい」君主と讃えられているレオポルト三世フリードリヒ・フランツである。しかしここでグーツムーツが、古代オリンピックの復活とも表現した体育競技会<sup>67</sup>の社会的意義を、ただ体力を鍛え「健康な身体」を作るということだけに見ていたわけではないことを確認しておきたい。グーツムーツは続けて次のように述べている。

《統治者たちよ、全国民 (ein ganzes Volk) を導き、彼らの愛を得るのに、〔このような競技会は〕何と素晴らしい手段であることか。この革命の時代に、何と重要で、推奨する価値をもっていることか! 》<sup>68</sup>

「革命の時代」が訪れ、統治者たちにとってその秩序の維持は大きな問題となりはじめたばかりである。君主が領民に慈悲深くあり、君主が領民の生活を常に気にかけているのだということを知らせること、すなわち領民から愛を得る手段として体育競技会がいかに

---

65 GutsMuts (1793) S.62-63. 成田訳 88 頁。後半が、改訂版での削除部分である。

66 GutsMuts (1793) S.63. 成田訳 88 頁。

67 もちろんグーツムーツにしても、ヴェルリッツの競技会が古代ギリシアのオリンピックと「同じ」であるとは言っておらず、「まるでオリンピックのよう」と述べているにとどめている。ミヒャエル・トマスは、この競技会の開催は毎年で、競技は徒競走のみであり、一人の君主の下で領民が集まっているにすぎないとして、この競技会とオリンピックとの違いを強調し、両者を安易に接続した点でグーツムーツを批判する。Thomas, Michael (2007) p.96-111.

68 GutsMuts (1793) S.63. 成田訳 88-89 頁。こども改訂で削除された。



重要な役割を果たすかが説かれている。ここには「強く健康な身体に健全な精神が存する」という『青少年の体育』冒頭に掲げられたスローガンが、「革命の時代」の中で君主と臣民・領民を再結合させることへの期待を見て取ることができるだろう。言い換えればそれは、群衆の集う体育競技会がもつ社会秩序の維持機能である<sup>69</sup>。

### 3.4 第二版における改訂問題——何が削られ、何が残されたか

『青少年の体育』の中の「古代オリンピック」に関する記述を見てきた。グーツムーツの力点は、オリンピックの競技種目や競技方法、記録などではなく、むしろ競技会が開催される情景、とりわけ人びとがそこに結集し興奮した時間を共有する点にあった。〈大群衆〉〈歓声と興奮〉〈花冠の名誉〉〈エケケイリア〉〈2つの神殿と女性の競技〉〈祭典の開始〉〈競技〉〈宗教性〉という8つの要素について見てきた通りである。

全体は三部構成、原書で255ページにもなる大部の本書であったが、1793年の刊行後、瞬く間に各国語に翻訳され欧州に普及していった。とりわけ第二部以降で、跳躍、走、投を始めとして、個々の運動の意義、準備する用具、一日の運動量、指導方法、注意点など、グーツムーツ自身がシュネッペンタールの教育現場で体育の主任教師となった1786年以後の13年にわたる実際の指導経験に基づいた方法論の記述が注目されたのである。それは「世界初の体育書」であった<sup>70</sup>。この体育指導方法の体系化が、グーツムーツを「近代体育の父」としたのである。翻訳の広がりもあって、各国からグーツムーツの下に教えを乞いに来る人が後を絶たず、後に触れるトゥルネンの創始者フリードリヒ・ヤーンもまたその一人であった<sup>71</sup>。

そして11年後の1804年に全体に手を加えた改訂版が刊行される。この年にグーツムーツはプロイセン政府に「体育」を学校教育に導入するよう進言する<sup>72</sup>。しかしこの時は、

---

69 もちろん、この点についてはデュルケムの集合的沸騰論とスポーツとの関連を容易に見出すことができよう。

70 成田（1979）219頁。

71 成田（1979）219頁。

72 こうした進言は、たとえば初版の古代オリンピックの記述において、次のように述べられて、公的な教育における競技会の開催を推奨する記述に見いだせる。「政府が教育の事柄に干渉すべきかどうかという問題は、肯定に値しなかったとしても、政府が公共祭典を少なくとも奨励している点に関する限り、それを承認せねばならないだろう」。GutsMuts（1793）S.59. 成田訳83頁。あるいはヴェルリッツの競技会について、君主がこれを開催することを称賛し推奨していることにも、それは現れている。ただしここで、政府による教育への「干渉」を「肯定に値しない」という面から付言されていることは見逃しがたい。

その後のナポレオン戦争とプロイセンの敗北、そして占領、という劇的転換を迎える時期であり、進言した企画は立ち消えとなる。

この年に出版された改訂版『青少年の体育』は、大きな改訂をともなっていた。その改訂は、基本的には個々の体育種目の体系化の完成と言えるだろう。マックス・ヴェーバーの言葉を用いれば、それは合理化である。そしてこの合理化、体系化の過程で、初版の記述の何が削除され、何が残されたかは、とくにオリンピックの問題に焦点化する本研究においては重要な意味をもつだろう。

すでに本稿では引用の際に《 》で括って削除部分を示してきたが、初版で感激をもって語られていた古代ギリシアのオリンピックの情景は、そのほとんどが削除されたのである。

もちろん削除されずに残った箇所もある。オリンピア、イストミア、ピュティア、ネメアで公的な競技会があったという記述が残り、大群衆の殺到については繰り返された部分はかなり削られたが、残ろうじて残り、それらが宗教的祭典であるといった記述は残った。

その一方で、エケケイリア（聖なる休戦）、オリンピアの地の美しい光景、神殿の記述、ヘライア祭（および女神の祭典における女性たちのみの競技会）、盛大な供儀、音楽や呼び出しの声、競技に際して轟く歓声、競技の種類（もともと少ない記述ではあった）、勝者の授賞式の模様、などが一括してバツサリと削除された。グーツムーツが初版で感激をもって記述した部分が、時を経て記述をより合理化・体系化する際に削除されたということだろう。

もちろん記述を整理する上で、そうした感激的な部分が削られることはよくあり、珍しいことではない。では、それらが削除された改訂版の記述の流れがどうなったのか確認しておこう。

初版からあった、祭典への人びとの殺到や、花冠の名誉をかけた競技会であることに引き続き述べられるのは——具体的な競技会の準備の様子、競技の模様、授賞式などの中間部分が削除された結果——、一気に次の部分となった。

この《公共競技会》は特に国民精神 (Nationalgeist) を保持し、青少年を柔弱 (Weichlichkeit) からひきもどし、彼らに男性気質 (Mannsinn) を注ぎ込み、英雄 (Heroen) にまで形成するものであった。——この種の運動は青少年の間で一般的な傾向となり、多くの家庭は、身体を訓練できるように、住宅や別荘に私的な施設を備えた。洗練 (Verfeinigung) という横暴な支配に完全に打ち負かされたくはないと考えているすべての教養ある国民 (alle gebildeten Nationen) は、そのようにあるべきだと

思う。<sup>73</sup>

もとより記述それ自体は初版からあるものだが、オリンピックに関してはこれまで触れてきたように記述の中心は情景描写であり、競技に集う観衆の息づかいであった。それらの具体的な記述がなくなった分、残された部分が強調されることになるのは必定である。改訂版では、国民精神の保持や（フランス流）洗練化への対抗といった部分が際立ってきて、古代オリンピックへの憧憬は色褪せたものになったと言わざるを得ない。

そして古代オリンピックの生き活きとした記述が削除されたのと同様に、オリンピックの復活とまで言わしめたヴェルリッツの競技会についても、その景観の素晴らしさや、競技が終了した後の食事会やダンスなどが削除された。「革命の時代」に統治者に競技会を開催することの意義を呼びかける一節も、削除された。

もともとゲーツムーツは、初版の時点から、古代オリンピックの復活を夢見ていたわけではなかった。古代オリンピックについて詳細に語られていたのは競技の具体的な模様ではなく、選手も観衆も関係者も、そしてオリンピアには行けなかった人びとも含めて、多くの人びとが祭典に強い関心を持つこと、その祭典に向けて人びとが常日頃から「身体」の「訓練」に価値を置くこと、したがって社会的にも「体育」に高い価値が置かれているということであった。その典型的な姿が、古代オリンピックであったということである。

『青少年の体育』がドイツ以外の各国にも強い影響を及ぼし、「体育」の意義が評価され、各国から人びとがゲーツムーツの下に集ってくるようになるという状況は、その理想が実現されつつあった証しと言えるだろう。

また初版から残された部分の一つに、メルクリアリス（Hieronymus Mercurialis, 1530-1606）からのやや長めの引用文がある。ゲーツムーツは、メルクリアリスの主張が「古代のすぐれた訓練（Übung）を再び流行させるために、またそれによって当時の人びとを身体的により強く、より健康にするために（körperlich stärker und gesünder zu machen）<sup>74</sup>」

---

73 GutsMuts (1793) S.60, (1804) S.140, 成田訳 85 頁。主語の「この公共的競技会」(Diese öffentlichen Spiele) は、改訂によってただ「これ」(Diese) のみになった。

また、訳語の問題を補足しておく、Verfeinigung は「純化」「改良」「浄化」などとも訳せる。成田訳は「文明化」としているが、Zivilisation 概念と区別しておくために、ここでは「洗練」と訳しておく。

74 GutsMuts (1793) S.60, (1804) S.141, 成田訳 85 頁。「身体的により強く、より健康に」という表現は、『青少年の体育』冒頭のフレーズに通じているとみて良いだろう。

記されたと述べて、次の長めの一節を引用し、身体訓練を重視した教育をするよう呼びかけている。

「古代の人びとは体育（Gymnastik）を高く評価しており、プラトンやアリストテレスも——これ以上の人の名をあげる必要はおそらくないと思うが——人びとがこの術を訓練していない国家は最良の国家ではないとしていたほどである。この点は正当なことだろう。というのも、もしわれわれが常に精神の形成を配慮せねばならず（Bildung des Geistes sorgen müssen）、しかも精神は身体なしには（ohne den Körper）重要なことも価値あることも完成することができないとすれば、われわれは確かに身体の健康とすぐれた技能とに配慮せねばならない（für Gesundheit und edle Fertigkeiten des Körpers sorgen müssen）からである。身体はそれによって精神に奉仕できるし、その仕事を妨害しないだけでなく、援助するようになる。だからプラトンは——ただ精神修養（Geistescultur）だけで、怠惰や無為によって身体を破壊する（den Leib durch Faulheit und Nichtsthuerei zerstören）ような人を、身障者（Krüppel）と呼んでいる<sup>75</sup>。」

〔メルクリアスが述べた<sup>76</sup>〕この箇所にはきわめて多くの真実が述べられている。父親や教育者や国民の上に立つ人たちは、ぜひともこれを肝に銘じていただきたい《！》<sup>77</sup>

以上の古代オリンピックの記述の具体的な描写の次に置かれていたメルクリアスからの

75 Nichtsthuerei や Krüppel は侮蔑的・差別的な響きをもつ表現である。該当箇所についてグーツムツも注で引用するメルクリアスの原文——ただし第二版では削除された——では、“propter quod in Protagora Plato cum esse claudum appellandum dixit, qui solum animum exercens, corpus ignavia atque otio consumit.” とある。Hieronymus Mercurialis, 1672, *De Arte Gymnastica*, Amstelodami, p.14. メルクリアスはここでプラトンの『プロタゴラス』に言及している。しかし『プロタゴラス』では、たとえば子どもの体育教育の目的について次のような議論がされているにすぎない。「それ〔子どもを体育の先生につけるの〕は、子供たちがよりすぐれた肉体をもつことによって、すぐれた精神に奉仕できるようにするためであり、そして戦争にのぞんでも、そのほかの行為においても、肉体が劣悪であるために、余儀なく怯懦なふるまいをしなければならないというようなことのないためである。」プラトン『プロタゴラス』（藤沢令夫訳）326C、『プラトン全集 8』147頁。

76 Mercurialis (1672) p.14.

77 GutsMuts (1793) S.60, (1804) S.141, 成田訳 85-86 頁。改訂に際して、初版の感嘆符 (!) はピリオド (.) にトーンダウンした。

引用が、具体的描写を大胆に削除した改訂後にも残った。そのためこの引用が、改訂版における古代オリンピックの最終的意味づけとなった感がある。

しかも、それに引き続くヴェルリッツの「オリンピックの復活」についての記述も、君主による公共の国民祭という部分が残され、具体的な部分が大きく削除されたことで、相対的に「国民精神」を訴えかける部分が強調されることになった。

古代ギリシアのオリンピックやヴェルリッツでのその疑似復活は、選手のみならず、大群衆となって殺到する観衆を含めた社会的な支持の下でなされる体育祭として、それに向けた身体訓練を通して、「健全な精神」に奉仕できるだけの「健康な身体」を養うよう教育するという理想の象徴として位置づけられた。そして『青少年の体育』の普及によって初版の目的を一定程度達成したグーツムーツは、次のステップに向けて改訂を施したとすることができる。叙述を整理して合理化＝体系化するという作業は、改訂第2版を出すに当たって当然の作業ではある。しかしそこで施された改訂は、奇しくもその合理化＝体系化によって、すでに初版にもあった一面を際立たせていくことになった。すなわち、大衆が熱狂する体育祭を開催することで、下層階級をも含めたすべての人びとが日頃の鬱憤を晴らすだけでなく、人びとに愛郷心から国民精神にまで通じるアイデンティティ形成の機会を与え、社会秩序を維持するという体育祭の機能が、相対的に際立たせられていったと考えられるのである<sup>78</sup>。

もちろん、改訂版が出された1804年段階でのグーツムーツがどこまで意識してそうした性格を強めようとしたのかについて確かなことは言えない。しかしまさにこの1804年は、ナポレオンが戴冠した年であった。すでに触れたように、この年グーツムーツはプロイセン政府に体育教育制度を進言した時期でもあり、グーツムーツも対仏関係の政治情勢を意識しつつ国家的教育の視点から改訂版を出したと考えることは、改訂の内容からも無理はないであろう。実際その後のグーツムーツの議論は、古代ギリシアに由来した名称であり、したがってドイツに限定されない一定の普遍性を持ち得た「体育 (Gymnastik)」概念から、フリードリヒ・ヤーンがドイツ性を打ち出して「ドイツ語」として造語した「トゥ

---

78 なお、オリンピックに関連しない部分では改訂による加筆も多い。オリンピックに焦点化する本稿では取り上げられないが、たとえば「健康の強化 (Stärkung der Gesundheit) のみが最終目的 (Endzweck) なわけではない」ということも加筆された。そこで強調されたのは、「依存からの脱却 (Unabhängigkeit)」である。GutsMuts (1804) S.155. 強制的な「教練」ではなく、自発的に運動することの重要性を説くグーツムーツの思想が見られる。

ルネン (Turnen)」を採用する。ここに来て、ゲーツムーツが当初企図した「体育」は、いっそう強く国家と結びつき、「軍事教練」的性格を前面に打ち出していくことになるのである<sup>79</sup>。

## 4. ギムナスティクとトゥルネン

「健康な身体に健全な精神が存する」という著作冒頭の引用は『青少年の体育』の基本理念を示しているし、「《生きるために体育をきなさい。だが体育をするために生きてはならない<sup>80</sup>》」という命題も体育の目指す方向が示されている。

では、そもそも「体育」とは何か。この新たな教育について定義 (Definition) の必要を感じたゲーツムーツは、活字を太くかつ大きくして特に目立たせながら、「体育」概念を次のように規定する。

《体育は若々しい喜びをまとった作業である。》<sup>81</sup>

こう定義した上で、この作業 (Arbeit) について説明がなされている。たとえば、それが「筋肉や神経を強くする」とか、柔弱な感覚を除去して「身体的、精神的人間をより一層鍛錬する」とか、「身体を強健で、たくみで、敏捷にする」とか、「人間を無感覚にさせるような日傭労働者の労働、あるいは、身体の構造をねじまげる重荷であってはならない」等々が指摘されている<sup>82</sup>。

しかし、この「定義」も 1804 年の改訂版で削除された。「若々しい喜びをまとった作業」

---

79 もとより、すでに見てきたように、身体訓練と戦争とを関連させる記述は『青少年の体育』の初版にもあったが、前景にあったわけではない。

80 GutsMuts (1793) S.105. 成田訳 134 頁。

81 GutsMuts (1793) S.101, (1804) S.177. 成田訳 129 頁。強調は原著者ゲーツムーツによる。作業は Arbeit であり、「体育は若さを装った労働である」とも訳せる。「労働」をめぐる問題は、古代ギリシア (ハンナ・アーレント) から、マルクスの労働概念、マックス・ヴェーバーによる「職業 (Beruf)」概念の問題、ナチス強制収容所の門扉に記された「労働は自由にする (Arbeit macht Frei)」、そして現代の労働問題までと広範にわたるが、体育思想・身体観を踏まえた考察はそれらの問題群を貫通する視点を提供しうるものと思われる。

82 GutsMuts (1793) S.101-102. 成田訳 129-130 頁。

という部分が、その後の合理化＝体系化にそぐわなかったとも考えられる。けれどもそれによって、日傭い労働者の労働のようであってはならない——それは「健全な身体」の理念からも導くことが可能である——というような思想も同時に削除された。そのことは、『青少年の体育』の初版では未分化ながらも含まれていた多様な方向性が消失し、体育思想の方向をそれまでの「健康な身体」の形成が目指していたのとは異なるものとして提示していく兆しと見ることができる。

このゲーツムーツの思想的変化は、時代状況に大きく影響されたものだった。

1806年にはイェーナでプロイセン軍がナポレオン軍に敗れ、ナポレオンがベルリンに入城する。この敗北と占領を目の当たりにしたフィヒテが、1807年に有名な「ドイツ国民に告ぐ」の連続講演を開始したことはよく知られている。『ドイツ国民に告ぐ』では、「全体的人間の形成を約束する教育、特に、自らの独立を回復し将来も維持しようとする国民に施されるべき教育としての」身体的訓練の必要性が言及されている<sup>83</sup>。

その流れの中で、1816年にはゲーツムーツの下で学んだフリードリヒ・ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn)が、エルンスト・アイゼルンと共著で『ドイツ・トゥルネン(Die Deutsch Turnkunst)』を刊行する。トゥルネン(Turnen)は、ゲーツムーツが提唱した体育(Gymnastik)とは名称からして異なり、ドイツ語の伝統からヤーンが造語したもので、「ドイツ的」な国民体操運動であった。すでにヤーンの活発な活動は、一部の人びとの間では注目の的であった。

すると翌1817年に、ゲーツムーツは自らギムナスティックではなくトゥルネンの語を用いて、愛国心を前面に押し出した体育書としての『祖国の子ども達のためのトゥルネン教本(Turnbuch für die Söhne des Vaterlandes)』を著した<sup>84</sup>。それは、かつてゲーツムーツが『青少年の体育』で論じて各国で受容された体育思想とは大きく異なり、「戦争」と「ドイツ」を強調するものであった。しかし、時代状況の影響を受けながら、ゲーツムーツ自身が今度はヤーンの方角で自らの体育書を著したのである。その「まえがき」は、『青少年の体育』とはまったく異なる言葉で始まっている。それは、かつての自己を否定する内

---

83 Fichte (1808) 邦訳174頁。この体育教育についてフィヒテはペスタロッチに基づいて論じているが、そこでは身体訓練の順序についてはこれからだと述べられており、体系的な体育指導書であるゲーツムーツの『青少年の体育』やヤーンの著作は参照されていないようである。

84 同じ1817年にはゲーツムーツの教え子であるカール・リッターが『自然および人類史との関係における地理学』を刊行している。

容をも含んだ、悲愴な決意のにじみ出た書き出しであった。

本書の基本思想は、祖国防衛者の準備に関する問題であり、したがって、身体の観点での一般的な人間教育 (allgemeine Menschenbildung) については、ここでは一切言及されていない。その目的を徹底的に身体能力の開発に設定しなければならない純粋に教育的な体育 (rein erziehliche Gymnastik) は、自己を訓練する者の身体に立ち戻るにすぎない。私はそのようなことをしたいわけではない。私のしようとしているのは、トゥルン・クンスト (Turnkunst) すなわち身体能力を開発するにあたり、課題の形式と内容において常に将来の防衛者という特別な目的を堅持し、それによって純粋に戦士的な訓練 (rein kriegerischen Uebungen) の準備教育となるものである。私はすでに23年前にそのための道を切り開き、12年前にはその道をさらに開いたのだった。私の喜びは、これらの訓練を人びとが広く採用してくれたことである。今や、私の体育 (ギムナステイク) の最後の言葉 [『青少年の体育』第二版の「まえがき」の結語] が私をせき立てる。「前書きの終わり」にこう書いた。「我らは立っているところで根をはってはならない、むしろ、前進あるのみ！」と。私はこの点にこだわりたい。<sup>85</sup>

本稿冒頭でも触れたように、1793年の初版『青少年の体育』の「まえがき」でグーツムーツは「健康な精神に健全な身体が存する」という句を置いていた。1804年の改訂版でも、その点は変わらなかった。

しかしオリンピックの記述に限定してではあるが、第二版の改訂によって、未分化なまま混在していた種々の性格の内の愛国的な部分が結果として際立つこととなった。その改訂第二版では「あとがき」の末尾に新たな句が置かれた。それが、「我らは立っているところで根を張ってはならない、むしろ、前進あるのみ！」のフレーズであり、1817年の『祖国の子ども達のためのトゥルネン教本』<sup>86</sup>の冒頭段落に掲げられたのである<sup>87</sup>。この「前進」へのこだわりは、かつて自らの提唱したギムナステイクに代えて、教え子のヤーンが新たに唱導するトゥルネンへと立場を変えること、したがってかつての自己を否定する決意のように聞こえるのである。

85 GutsMuts (1817) Vorbericht.

86 以下、『トゥルネン教本』と略記する。

87 GutsMuts (1804) S.XVI.



『青少年の体育』の「まえがき」から引くのであれば、第二版の末尾の句ではなく、初版で記した劈頭句を引くこともできたはずだ。しかし「健康な身体」や「健全な精神」という——それ自体も未分化な——語句も、それに伴った体育思想も影をひそめた。普遍的でもありえた「純粋に教育的な体育」は否定され、「祖国防衛」のための「純粋に戦士的な訓練」が肯定される。もちろんこの間にナポレオン戦争による敗北経験や、フランスによる占領の経験があり、「ドイツ国民」という意識の高まりがあった。ゲーツムーツのみならず、多くの知識人も祖国防衛、戦士の訓練への意識を高め、18世紀末にはまだ「国家」意識からほど遠かった領邦の「領民」「臣民」が、「ドイツ民族」「ドイツ国民」を徐々に意識するようになっていくプロセスにある。

だがその傾向は、ナポレオン戦争の「後」に初めて生じたわけではない。1804年の『青少年の体育』の「第二版」ではすでに、初版にはなかった加筆によって「体育 (Gymnastik)」が戦時教練へと接合されていたことも見逃すことはできない。たとえば第17章「体育実践としての軍事演習 (Kriegsübungen zu gymnastischem Gebrauch)」が新たに設けられている<sup>88</sup>。その議論は、『トゥルネン教本』では正面から、次のように述べられるに到る。

純粋に教育学的な身体訓練 (die rein pädagogischen Leibesübungen) は、厳密な選択 (Auswahl) のもとでトゥルネン教本に収録され、トゥルネン訓練の基礎とされなければならないのだが、さらに、一人一人の弱さ (Schwache) を途方もない強さ (Kraft) へと高め上げる戦争 (Krieg) という根本思想こそが、それら教育学的身体訓練を、トゥルネン訓練 (Turnübungen) へと変えなければならないのである。<sup>89</sup>

もともと「軟弱さ (Schwache)」の克服は、初版『青少年の体育』のキーワードであり、ゲーツムーツが当初唱えていた「体育」の主要な目的の一つであったことはすでに見た。それが(後年で言うところの)「純粋に教育学的な身体訓練」であったかどうかは定かではないが、「健康な身体」「健全な精神」に通じたものであったということ是可以するだろう。その流れは、エケケイリア(聖なる休戦)の保護の下でオリンピアの祭典に人びとが殺到し、選手も観衆も一体となる古代ギリシアの情景と自然な形で連続している。

しかし『トゥルネン教本』では、「体育」で主張されていたはずの身体訓練はあくまで

---

88 GutsMuts (1804) S.392-417. 銃を持たない訓練と持った訓練が分けて論じられている。

89 GutsMuts (1817) Vorbericht.

目的のために「選択」された上で初めてトゥルネンへと引き継がれるのであり、それだけでなく身体訓練は「戦争」によってトゥルネン訓練へと転換させられねばならない。ここに、古代オリンピックの話の出る幕のないことは明らかであろう。

もちろん、体育が戦争とつながるという問題は、古代ギリシアのオリンピックからして意識されていたことであり、体育と戦争との結合それ自体は初版『青少年の体育』にもすでに書き込まれていたことだった<sup>90</sup>。ただしそこではまだ、戦争との関係ましてや軍事演習との関連などが「章立て」されたり「まえがき」で書かれたりはしていなかった。時代と共に、その一面が突出して強調されるに至ったのである。

『青少年の体育』初版から第二版には連続と断絶があり、さらにその第二版の「まえがき」から『トゥルネン教本』の「まえがき」にも連続を見出せる。萌芽的に見られた種々の事柄が、徐々に一つの方向を強調する形で顕在化されていき、別の事柄が後景へと追いやられていった。

けれども皮肉にも言うべきか、グーツムーツの著作の幅広い受容はその後も続いてギリシアにも及び、1837年にそのギリシア語版が出版された<sup>91</sup>。版元はギリシア王室であり、アテネの師範学校の教科書にもなって、オリンピック競技会に関するグーツムーツの思想がギリシア人に逆輸入されていったのである。教育の効果というのは即効的であるより、時間をかけた方が裾野は広がることが多い。ギリシア語訳が出て22年後の1859年、ギリシアでオリンピック競技祭が復活するのである<sup>92</sup>。

グーツムーツ自身はすでに1804年の第二版『青少年の体育』において、古代ギリシアのオリンピックに関する精彩に富む記述をバツサリと削除してしまっている。にもかかわらず、当のギリシアにおいてグーツムーツの「体育」思想が受容されていったのは、体育競技会による大衆の一体化という理想が、トルコからの独立間もないギリシアの人びとに、民族的・国家的なアイデンティティの形成を喚起するものとなったからではなからうか。

ともあれその後、クーベルタン主導による1896年の近代オリンピック第1回大会がア

---

90 たとえば第二部で個々の種目について述べるなかで、そうした記述が見られる。「跳躍」についてはこう述べられている。「ギリシア人の間では、跳躍、ハルマは一般に五種競技に数えられていた体育運動であった。人びとはこれを戦争の準備としても利用したにちがいない。」GutsMuts (1793) S.106. 成田訳135頁。また、『プロタゴラス』について言及した先の注においても、戦争について触れられている。

91 以下のギリシアにおけるグーツムーツ受容については、真田久(2011)6頁。

92 以上、真田(2011)の指摘による。

テネで成功した背景に、19世紀中葉に復活開催されていたギリシア・オリンピックの経験があったとすれば、そのさらに背後には<sup>93</sup>ゲーツムーツの『青少年の体育』という初の体系的体育書の存在があると言うこともできるだろう。

## 5. トゥルネンと近代オリンピック

汎愛派教育の流れを汲み、身体訓練によって「健康な」身体を基盤とした「健全な」精神をもつ人間の育成を目指した『青少年の体育』の理念は、その各国への翻訳普及と戦争の時代の中で、身体訓練を基礎とした愛国心（祖国愛）と祖国防衛のための「準備教育」の性格を濃くしていった。人びとが体育を通して一体となる象徴としての（古代／疑似）オリンピックは、もともと潜在させていた戦争で戦う兵士を鍛える身体訓練へと転化したのである。

このゲーツムーツの思想転換を決定的にしたのは、何よりも社会政治的状况としてのナポレオン軍に対する敗戦と占領の経験であったろう。そして、それと密接に関連した思想運動としての、フリードリヒ・ヤーンのトゥルネン運動であった。ゲーツムーツが『トゥルネン教本』を出した前年の1816年に、ヤーンはすでに自ら概念化し運動を展開していたトゥルネンについてまとめた『ドイツ・トゥルネン (Die Deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze)』を刊行している。

すでに1810年に『ドイツ民族 (Deutsches Volksthum)』を刊行し、翌1811年に「トゥルネン運動 (Turnbewegung)」を開始して「ドイツ性の涵養」を大目標に掲げていたヤーンは、いわば初期ドイツ・ナショナリズムのイデオログの一人であった。ヤーンはまた、理念の実現を支える組織化にも長けていた。ドイツ・トゥルネンは、一方で「自由」や「統一」を掲げ、他方で「ドイツ性」を称揚しその増進を掲げ、「国民化」を推し進める一大組織となっ

---

93 おそらく、ここでの媒介項にヤーンがいたと考えることは不当ではなかろう。ヤーンは、毀誉褒貶の激しい人物で、投獄も顕彰もされているが、最終的にはバイエルン州のレーゲンスブルクにある「ヴァルハラ」に胸像が掲げられている「英雄」である。バイエルン王子ヴィッテルスバッハがギリシア国王オソン1世として即位するのが1833年だから、その4年後にゲーツムーツの体育書がギリシア語化されていく過程で、ヤーンによる何らかの関与があった可能性はある。

ていった。この集団主義的な規律化を推進するトゥルネンが、身体訓練を通して（健康で健全な）心身のバランスの取れた人間性を養おうとしたグーツムーツのより個人主義的<sup>94</sup>な「体育（Gymnastik）」と、本質的に相異なる志向をもったことは明らかである。

本稿では、ヤーンおよびトゥルネン運動のその後の史的展開と歴史的作用を論じることができない。だが、（現代ドイツにまで連綿と続く）大勢力となった、民族的伝統の保持を目的に掲げるトゥルネン運動が、競争的性格をおびるイギリス由来のスポーツと軋轢をおこし（スポーツ＝トゥルネン論争）<sup>95</sup>、また、国際化を目指すフランスのクーベルタン主導による近代オリンピック運動と軋轢をおこしていくことは、当然の流れであった。

それらの軋轢を全て押し流して、この祭典を一大スペクタクルとして「完成」させたのがヒトラーのベルリン・オリンピックであるとすれば、19世紀初頭にグーツムーツの『青少年の体育』がたどった「民族主義的転回」の歴史的運命が、20世紀初頭に歪んだ形で極大化されたと言うことができるのかもしれない。

それは、「健康な身体に健全な精神が存する」というロック、グーツムーツ、そしてクーベルタン<sup>96</sup>など身体競技を主導した人びとの引いたフレーズが、未分化なまま胚胎していた諸々の可能性の内の一つを歪められながら、ナチスになどによって<sup>97</sup>極大化され、優生思想に連なる一つのスローガンになっていったことと重なる歴史でもある。

94 グーツムーツの「体育」が「個人主義的」な性格をおびていたことは、グーツムーツが『トゥルネン教本』において、純粋に教育学的な身体訓練は「自己を訓練する者の身体に立ち戻るにすぎない」と述べていることにもうかがうことができる。しかしその「体育（ギムナスティク）」が、「祖国防衛」に向けた、つまり集団主義的な性格の「トゥルネン」へと転化していったのである。GutsMuts (1817) Vorbericht.

95 クーベルタン自身も、ベルギーの体操家が「ギムナスティク」と「スポーツ」とは相反するものだとの反論をしてくることを嘆いている。他方で、ドイツに呼びかけることで、普仏戦争の敗者であったフランスが「抗議」してくることに、「フランス的でない」「騎士的でない」とも嘆いている。ただし、そのときのクーベルタンがどのように感じふるまったかは別個に考えておく必要はある。クベルタン (1962) 24頁。

また、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の終盤で、「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利努力は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の熱情 (rein agonale Leidenschaft) に結びつく傾向があり、その結果、スポーツ (Sport) の性格をおびることさえ希ではない」と述べているが、ここで「スポーツの性格」と述べた点に、「ドイツ的」で必ずしも競争を強調しない「体育」ないし「トゥルネン」と、競争を中心とする「スポーツ」との差異を読み取ることもできよう。Weber (1920) S.204, 大塚訳 366頁。

96 注3を参照。

97 そしてまた、周辺の連合国においても。ナチスの「記憶」との関連では、たとえば映画「ミュージック・ボックス」(1989年)がこのフレーズを象徴的に用いている。

[文献]

- 有賀郁俊、2002、「西南ドイツにおけるトゥルネン協会運動——1840年代のシュヴァーベンを中心に」望田幸男・村岡健次監修『近代ヨーロッパの探究 8 スポーツ』ミネルヴァ書房。
- Burkhardt, Jacob, 1978, *Griechische Kulturgeschichte, Gesammelte Werke*, Basel/Stuttgart, Beno Schwabe & Co. Verlag. (=1998、新井靖一訳『ギリシア文化史 6』筑摩書房 [ちくま学芸文庫]。)
- クベルタン、ピエール、1962、(大島謙吉訳)『オリンピックの回想』ベースボールマガジン社。
- Fichte, Johann Gottlieb, 1808, *Reden an die deutsche Nation, Fichtes Werke*, Walter de Gruyter. (=2014、早瀬明訳『ドイツ国民に告ぐ』『ファイヒテ全集 17』哲書房。)
- Gash, Rudolf (Hrsg.), 1909, *Jahrbuch der Turnkunst: Jahrbuch der Deutschen Turnerschaft 1909, mit 175 Bildern und 7 Bildertafeln*, Leipzig: Emil Stock.
- Guttman, Allen, 1994, *Games & Empires: Modern Sports and Cultural Imperialism*, Columbia University Press. (=1997、谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳『スポーツと帝国——近代スポーツと帝国主義』昭和堂。)
- GutsMuths, Johann Christoph Friedrich, 1793, *Gymnastik für die Jugend, Enthaltend eine Praktische Anweisung zu Leibesübungen, Ein Beitrag zur Nöthigsten Verbesserung der Körperlichen Erziehung*, Schnepfenthal, im Verlage der Buchhandlung der Erziehungsanstalt. (=1979、成田十次郎訳『青少年の体育』明治図書。)
- , 1804, *Gymnastik für die Jugend, Enthaltend eine Praktische Anweisung zu Leibesübungen, Ein Beytrag zur Nöthigsten Verbesserung der Körperlichen Erziehung*, Zwyte durchaus ungearbeitete und stark vermehrte Ausgabe mit 12 von dem Verf. Gezeichneten Tafeln, Schnepfenthal, in Verlage der Buchhandlung der Erziehungsanstalt.
- , 1817, *Turnbuch für die Söhne des Vaterlandes*, Frankfurt am Main: Wilmans.
- , 1800, *Gymnastics for youth, or, A practical guide to healthful and amusing exercises for the use of schools: an essay toward the necessary improvement of education, chiefly as it relates to the body*, Freely translated from the German of C.G.Salzmann, London.
- Hardman, Ken, 2002, “Context for Sport and Physical Education in Germany”, Roland Naul and Ken Hardman eds., *Sport and Physical Education in Germany*, London and

New York: Routledge.

Hirsch, Erhard, 1997, „Olympische Spiele“ am Drehberg in Anhalt-Dessau zur Goethezeit”, *Nikephoros* (10) .

Horkheimer, Max & Theodor W. Adorno, 2020, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Frankfurt am Main: S.Fischer Verlag [Fischer Taschenbuch] . (=2007、徳永詢訳『啓蒙の弁証法——哲学的断層』岩波書店 [岩波文庫])

Kant, Immanuel, [1803] 1964, „Über Pädagogik“, *Immanuel Kant Werkausgabe in zwölf Bänden*, Band VI. (=2001、加藤康史訳「教育学」『カント全集 17 論理学・教育学』岩波書店。)

Locke, John, [1693] 1824, “Some Thoughts concerning Education”, *The Works of John Locke in Nine Volumes*, (London: Rivington, 1824 12th ed.) Vol. 8. (=1967、服部知文訳『教育に関する考察』岩波書店 [岩波文庫] / =2011、北本正章訳『子どもの教育』原書房。)

MacAloon, John J., 2008, *This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, London and New York: Routledge.

Marchand, Suzanne L., 1996, *Down from Olympus: Archeology and Philhellenism in Germany, 1750-1970*, Princeton and New Jersey: Princeton University Press.

May, Otto, 2015, *Friedrich Ludwig Jahn und die Turnbewegung*, Hildesheim: Franzbecker.

Mendelssohn, S., 1861, *Beiträge zur Geschichte des Turnens mit Bezug auf Waffenübungen, Kampfspiele etc.*, Leipzig: Robert Frieze.

Hieronymus Mercurialis, 1672, *De Arte Gymnastica*, Amstelodami.

森貴史、2017、『踊る裸体生活——ドイツ健康身体論とナチスの文化史』勉誠出版。

森田信博、1996、「グーツムーツのボールゲーム論について」『秋田大学教育学部研究紀要 教育学部門』(49)。

師尾晶子、2004、「第II章 祭典と競技」桜井万里子・橋場弦編『古代オリンピック』岩波書店 (岩波新書)。

Mosse, Georg, 1975, *The Nationalization of the Masses: Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*, New York: New American Library. (=1994、佐藤卓己・佐藤八寿子訳『大衆の国民化——ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房。)

村田奈々子、2016、「近代オリンピックの始まり——普遍的理念とナショナリズムのせめ

オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察

- ぎ合い」橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』山川出版社。
- 成田十次郎、1979、「グーツムーツの生涯」グーツムーツ『青少年の体育』明治図書。
- Naul, Roland, 2002, “History of sport and physical education in Germany, 1800-1945”, Roland Naul and Ken Hardman eds., *Sport and Physical Education in Germany*, London and New York: Routledge.
- 小原淳、2011、『フォルクと帝国創設——19世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察』彩流社。
- プラトン、1975、『プラトン全集 8 エウテュデモス・プロタゴラス』岩波書店。
- 坂入明、1987、「ルソーと汎愛教育派について——その身体教育論を中心にして」『東京家政大学紀要』（27）。
- 真田久、2011、『19世紀のオリンピック競技祭』明和出版。
- 寺田光雄、1996、『民衆啓蒙の世界像——ドイツ民衆学校読本の展開』ミネルヴァ書房。
- 土岐健治・井坂民子、2002、『楽しいラテン語』教文館。
- Thomas, Michael, 2007, “„Olympische Spiele“ am Drehberg in Anhalt-Dessau? : Zum Charakter und zu den Wettkämpfen der jährlichen Drehbergfeste bei Wörlitz 1776-1799”, in Krüger, Michael; Langenfeld, Hans (Hrsg.) , *Olympische Spiele und Turngeschichte: Beiträge aus der dvs-Sektion Sportgeschichte, Schriften der Deutschen Vereinigung für Sportwissenschaft, Vol.164, Deutsche Vereinigung für Sportwissenschaft*, Hamburg: Czwalina.
- Thomas, Raymond, 1991, *Histoire du sport*, Presses Universitaires de France. (=1993、蔵持不三也訳『スポーツの歴史 [新版]』白水社 [文庫クセジュ]。)
- Valdez, Damian, 2014, *German Philhellenism: The Pathos of the Historical Imagination from Winckelmann to Goethe*, New York: Palgrave Macmillan.
- Weber, Max, 1920, „Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus“, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, Tübingen: J.C.B.Mohr. (=1989、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 [岩波文庫]。)
- 山本徳郎、2004、「トゥルネンとギムナスティーク——トゥルネン史の基底にながれているもの」『体育学研究』（49）。